

「(仮称) 生物多様性ちば県戦略」専門委員会提言(案)

はじめに

要旨

第1章 戦略策定の趣旨

- 1 生物多様性の衰退が、わたしたちの資源・環境・経済の面でわたしたちに大きな負荷をもたらしているのみならず、人々の身体・健康の面でも影響を及ぼし、安全な生活をおびやかしている。
- 2 千葉は豊かな自然・文化に育まれた生物多様性を有してはきたが、その退行を阻止し、生命(いのち)のにぎわいをよみがえらせることが緊急に必要なになっている。
- 3 生物多様性がもたらす健全な環境と恵み多い資源を大切に、子どもたちや将来の人々に伝える仕組づくりを行わなければならない。

## 第2章 生物多様性と保全目標（50年後の生物多様性豊かなちばの未来像）

生物多様性とは、地球上に存在するすべての生物の変異を指す言葉であり、これには遺伝子から生物種、生態系にいたるあらゆるレベルの変異が含まれている。地球上の生物多様性は、約40億年前に生命が誕生してから現在にいたる生物進化のたまものであり、人類は生物の多様性をなくしては一日たりとも生き続けることはできない。穀物や野菜、果物、魚介類、家畜などの食料、スパイスや香料、抗癌剤として使われる植物などの生物資源は、すべて生物多様性からの恵みであるが、私たち人類は地球上の生物多様性のその一部を利用しているに過ぎない。1千万～1億種といわれる地球上の生物種のうち、人類が識別できているのは150～170万種に過ぎないのである。ところが、地球の歴史を1日にたとえれば、午後11時59分56秒（約20万年前）に誕生した現生人類によって、地球上の生物多様性の喪失速度は、100～1万倍に増加した。熱帯雨林の伐採などの生息地破壊、侵略的外来種による在来種の絶滅、過剰利用、環境汚染、気候変動などがその原因と言われている。地球上の生物多様性の保全と持続可能な利用をめざして、1992年に生物多様性条約が誕生したのにはこのような背景がある。

一方、地域の生物多様性は、人々の暮らしと密接な関係にある。房総半島に人が住みついてから約3万年、私たちは地域の生物多様性の恵みを楽しんで暮らしてきた。森林、河川、干潟などの生物多様性は、生物資源の源泉であると同時に、水源の涵養、洪水調整、土砂流出防止などの生態系サービスを通じて、人々の暮らしを支えてきた。また人々は、谷津田、台地上の畑、雑木林、茅場など、地形を生かした土地利用を行うことによって、里山と呼ばれる自然と共生した循環型社会を作り上げてきた。また地域の生物多様性は、大漁節や里神楽などに代表される農山漁村の文化の源泉でもあった。しかし、高度経済成長に伴う開発の波は房総半島にも押し寄せ、干潟の埋立、ゴルフ場開発、産業廃棄物の投棄などの開発による生息地の破壊、エネルギー革命と農業後継者不足による里山の荒廃、成田空港・千葉港など国際的な窓口であるがゆえの外来種の侵入などによって、過去50年間、房総半島の生物多様性は危機に瀕してきた。日本政府は生物多様性条約の加盟国として、1995年に生物多様性国家戦略、2002年に新生物多様性国家戦略を策定し、国レベルの生物多様性の保全と持続的な利用をめざした基本方針を定めている。私たちは、これからの50年、房総半島の豊かな生物多様性を取り戻すため、生物多様性ちば県戦略を定め、以下のような保全目標をめざして、すべての県民が力を合わせることを誓う。

1. 千葉県の生物多様性は、黒潮と親潮との出会いによる海の豊かさと、里山における人と自然との共生によって育まれてきた。これ以上の生物種の絶滅を回避し、遺伝子の多様性の消失を防止するとともに、房総半島の生物が安定的に生息・生育できる自然環境を回復することを目標とする。

2. 千葉県の生物多様性は、私たちの健康で安全な生活の基盤であり、資源やエネルギーの供給源でもある。生物多様性からの恵みを、私たちの世代で枯渇させることなく、将来の世代にさらに豊かな状態で引きつぐため、持続可能な資源利用と循環型社会を実現することを目標とする。
  
3. 千葉県の生物多様性は、房総半島の里山・里海を形成するとともに、私たちの豊かな文化を育んできた。生物多様性の喪失は、房総半島の文化の喪失につながりかねない。このため、人と自然と文化が調和して暮らすことのできる共生型社会を実現することを目標とする。

